母子関係が子どもの自己統制に及ぼす影響 — 自己統制尺度によるアプローチ —

塚 本 伸 一*

The Influence of Mother-Child Interaction on Child's Self-Control
—An Approach by Self-Control Rating Scale—

Shinichi TSUKAMOTO*

This article consists of three studies. The first and the second studies were conducted to develop a self-control rating scale for children. So were 408 kindergartener and first through sixth graders. The 15-item self-control rating scale showed high internal consistency and test-retest reliability. In a study of validity, the self-control rating scale correlated significantly with error scores from the Matching Familiar Figures test, the Draw a Line Slowly task, and latency scores from the Resistance to Temptation task. A factor analysis resulted in two factors: (1) Personal and (2) Interpersonal Self-Control. Girls were rated as better self-controlled than boys. In the third study, the relationship of mother-child interaction to child's self-control was investigated. The mother's child rearing attitudes correlated significantly with self-control ratings.

Key Words: self-control, rating scale, mother-child interaction

親や教師の外的な統制がなくとも、自己の不適切な情緒や行動を抑制し、社会的ルールに従った適応的な行動がとれるようになることは、子どもの重要な発達課題である。このような自己統制の発達に、社会化の要因、特に母子関係は重要な役割を果たすものと考えられる。

しかし、この問題を組織的に検討した研究は多くない。Arend、Gove & Sroufe (1979) は、18ヶ月の時の母子の愛着と幼稚園の時の自己統制(自我コントロール)との関係を検討している。愛着の測定には、Ainsworthのストレンジ・シチュエーションが用いられた。自己統制の測度として、線をゆっくり引く運動抑制課題や満足遅延課題など複数の実験的課題の合成得点を用いた場合、愛着の群(Ainsworthの A、B、C群)間に自己統制の違いは見られなかっ

た。一方、柏木 (1988) では、母親のしつけと幼児の行動制御機能との間に顕著な関連が認められている。この研究では、母親の子どもへのしつけは子どもへの介入・過保護と友人との遊び経験が質問紙によって測定された。その結果、母親の子どもへの介入・過保護と自己抑制の全ての側面(遅延可能性、制止、ルールへの従順、フラストレーション耐性、持続的対処・根気)の間に有意な負の相関が認められた。

このように自己統制と母子関係との関連は研究により結果が異なり、明確ではない。また、柏木の研究は興味深いが、母親のしつけが介入・過保護と遊び経験に限られている。そこで本研究では、質問紙によってさらに多くの育児態度の次元を測定するとともに行動観察によっても母子関係を測定し、これ

^{*} 上越教育大学学校教育学部

らと幼児の自己統制との関係を検討する。これが本 研究の第1の目的である。

ところで、Humphrey (1982) は子どもの自己統制と知能との関係を検討し、両者に有意な関係を見いだしている。これに対して、Kendall & Wilcox (1979) の分析では無相関であり、結果は一貫していない。子どもの自己統制と知能との間に有意な関係があるか否かは、自己統制と母子関係の関連を検討する上でも重要な問題になると考えられる。それは子どもの知能と母親の育児態度との間に有意な関係があること(東・柏木・ヘス、1981)が知られており、知能をコントロールせずに自己統制と母子関係との関連を検討すると、両者に疑似的な関連が検出される可能性があるからである。従来、この点は考慮されてこなかったように思われる。そこで、本研究では子どもの知能と自己統制、及び母子関係との関連もあわせて検討する。これが第2の目的である。

本研究の第3の目的は、子どもの自己統制を測定 するための尺度を作成することである。従来, 自己 統制の測定には実験的方法と評定尺度の2種が主に 用いられてきた。実験的方法の代表的なものが満足 遅延課題と誘惑への抵抗課題である。満足遅延課題 の典型的な手続きは次のようなものである。子ども を個室に入れ, 実験者が戻って来るまで一人で待た せる。その際、待っていれば報酬を与えると教示す る。また、部屋のベルを押せば実験者はいつでも戻っ てくるが、その時には魅力の乏しい報酬しか貰えな い。ベルを押さずに実験者が戻って来るまで待って いられれば、魅力的な報酬が貰えるとも教示する。 Mischel らは、この手続きを使って組織的な研究を 行っている。 $5 \sim 12$ 才を被験者とした研究によると、 遅延報酬を選択する者の出現率は年齢とともに増大 し、8才半から9才頃に遅延報酬の選択が優位にな る。さらに、待ち時間の長さ、報酬が手に入る確率 が満足遅延の程度に関係していること, 遅延報酬を 選択するモデルの観察,報酬を見ない,報酬から注 意をそらす,報酬の動機づけ的側面より情報的側面 に注意を向けさせると遅延が促進されることが知ら れている (Mischel, 1974)。また、Mischel, Shoda & Rodriguez (1989) の縦断的研究によると、4才の時 に満足遅延の長くできた者は、青年期になってから も有意に注意深く,集中力があり,計画性があり, 知的能力が高い。さらに、目標に向かって努力する

ことができ、欲求不満耐性が高く、ストレスにも適 切に対処できるという。

誘惑への抵抗課題の典型的な手続きでは、まず子どもを数種の玩具が置かれている部屋へ入れる。この玩具は子どもにとって魅力的なものであるが、これに触れてはならないと教示する。その後、実験者は退室する。実験者は子どもに気づかれないようにワンウェイミラー等で子どもの行動を観察し、玩具にはじめて触れるまでの潜時、玩具に触れた回数、触れていた総時間等を記録する。観察時間は通常5分程度である。これまでの研究によると、逸脱を禁止する自己教示(Sawin & Parke, 1979)や誘惑に耐えるモデルの観察(Grusec, Kuczynski, Rushton & Simutis, 1979)が逸脱行動の減少に効果があることが明らかになっている。

実験的方法には、この他にも draw a line slowly 課題 (Maccoby, Dowley, Hagen & Degerman, 1965), Simon says課題 (Stromen,1973), 積木テスト,約束違反への反応テスト (氏家・田島,1987, 田島・柏木・氏家,1988,氏家・柏木・田島,1990) などが用いられている。

一方、評定尺度には、Kendall ら(1979)が3年生~6年生の児童を対象にして作成した、33項目から成る自己統制尺度(SCRS)やHumphrey(1982)がSCRSを簡便化した15項目から成る自己統制尺度(TSCRS)がある。わが国では、柏木(1988)が3才~6才の幼稚園児を対象として、71項目から成る教師評定による評定尺度を作成している。この尺度は自己主張・実現と自己抑制の2側面の測定を目的としたものである。また、西野(1990a、1990b)も幼児を対象にして、60項目から成るSRCI型、46項目から成るSRCI型スケール,及びSRCII型Qスケールを作成している。

実験的方法から得られる知見は極めて興味深いものであるが、課題の実施には手間がかかり、特別な施設を必要とする等、制約も多い。これに対して、評定尺度は学校場面等でも比較的手軽に利用することができる。また、子どもの実際の生活に即した、より具体的な場面を設定して質問文を作成することができるため、子どもの社会的行動の自己統制を検討する際には特に有効である。しかしながら、わが国の評定尺度は46~71項目と項目数が多く、評定を母親や教師・保母に依頼するうえで困難を伴う。そ

こで本研究では、より項目数が少なく簡便な自己統制尺度を作成する。

本研究では,まず自己統制尺度の作成を行い,この尺度を用いて幼児の自己統制と母子関係及び知能との関連を検討する。

研究 1

目 的

自己統制尺度を作成し、その信頼性を検討する。 前述のとおり、本研究の最終的な目的は幼児に適 用可能な尺度を構成することである。しかし、今後 の発展性を考えると、適用年齢の広い尺度を構成す ることは有益である。そこで、研究1では被験者に 児童も含めることとする。

方 法

被験者 被験者は横浜市内の保育園年長児,小学校1~6年生各2クラス(6年生のみ3クラス)の計408名(園児;男22名,女20名,1年生;男29名,女24名,2年生;男27名,女25名,3年生;男23名,女22名,4年生;男28名,女22名,5年生;男32名,女44名,6年生;男51名,女39名)である。保育園,小学校はともに横浜市郊外の新興住宅地にあり,環境は類似している。

自己統制尺度 Humphrey (1982) の TSCRS の 全15項目を意味が明確になるように意訳し、保育園、学校場面を想定した15項目から成る自己統制尺度を 作成した。各項目に対する反応形式は "全くそうである" から "全くそうではない" までの 5 件法であ

る。尺度の評定は各クラス担任が自分のクラスの全員について行った。保育園年長児24名、2年生37名、6年生25名については、第1回目の評定を行った約1カ月後に第2回目の評定を依頼した。

結果と考察

因子分析 15項目について主因子法による因子分 析を行い、固有値1.0以上の2因子についてバリマッ クス回転を行った(Table 1)。ここで抽出された2 因子に属する項目とHumphrey (1982) の2因子に 属する項目を比較すると、「人から注意されたり叱ら れたりしなくても、悪いことをした時にはそれがわ かる」の1項目を除いて Humphreyの cognitive/personal self-control 因子に属する項目は本尺度の第 1因子に, また, Humphrey の behavioral/interpersonal self-control 因子に属する項目は本尺度の 第2因子にそれぞれ高い因子負荷量を示している。 · 例外の1項目はオリジナルにおいても, cognitive /personal self-control因子への負荷量が .48, behavioral/interpersonal self-control 因子への負荷 量が .32と両因子ともに比較的大きな負荷量を示し ていた。両因子での相対的な負荷量の大きさは逆転 しているものの, 両因子に同程度の負荷量を持つと いう点では、本研究とHumphreyの結果とは一致し ており, 両尺度の因子構造は類似したものだと考え

本尺度の第1因子は「目標や目的に向かって頑張ることができる」,「時間のかかるおもしろくない課題でも、やり遂げるまで途中で投げ出したりしない」,

Table 1 自己統制尺度の因子分析

項目	第1因子	第2因子
目標や目的に向かって、頑張ることができる。	.809	. 288
課題や義務から気がそれてしまう。	.805	.310
勉強や課題が難しいと、いらいらしたり、あきらめてしまったりする。	.761	. 308
計画を立ててから実行に移す。	.756	. 155
時間のかかるおもしろくない課題でも、やり遂げるまで途中で投げ出したりしない。	.755	. 250
他の事に気を散らさず、自分のやっている事に注意を集中することができる。	.716	. 285
課題をあわててすると、つまらない間違いをよくしてしまう。	.663	.158
大人の人が見ていないと、やるべき事ができない。	.648	.384
自分の行動がどういう結果を招くか,予測することができる。	. 569	. 482
他の子どもと口げんかや取っ組み合いをする。	.157	.841
軽率な事をしゃべる。	.214	.770
行動を改めると約束しても、それがなかなか守れない。	.348	.726
何でもすぐに手に入れないと気がすまない。	.228	.647
みんなで行動する際、協調性に欠ける。	.230	.643
人から注意されたり叱られたりしなくても、悪い事をした時には、それがわかる。	.469	.621

「他の事に気を散らさず、自分のやっている事に注意 を集中することができる」などの項目を含み、注意 を集中して自己の課題を遂行し、継続的な達成の努 力をするといった自己統制の側面を表しているのに 対して、第2因子は「他の子どもと口げんかや取っ 組み合いをする」、「何でもすぐに手にいれないと気 がすまない」、「みんなで行動する際、協調性に欠け る」などの項目を含み、対人場面で自己の不適切な 感情や行動を抑制するといった自己統制の側面を表 しているものと考えられる。Humphrevはオリジナ ルの因子名に "cognitive" "behavioral" という表現 を使用しているが、これが自己統制行動のどのよう な特徴を指しているのか必ずしも明確ではない。む しろ, 両因子の違いは自己統制行動の対象となる課 題や状況が "personal" か "interpersonal" かとい う点に注目した方が理解しやすいと考えられる。そ こで本尺度では第1因子を個人的自己統制, 第2因 子を対人的自己統制と呼ぶこととする。

なお、以降の分析では、各因子に属する項目の評 定値をそれぞれ単純加算したものを各下位尺度得点 とする。

信頼性の検討 内的整合性を検討するために、クローンバックの α 係数を下位尺度ごとに算出したところ、個人的自己統制では、92、対人的自己統制では、86であった。共に満足できる値といえよう。

さらに、再テスト信頼性を検討するために、約1 カ月の期間をおいて、保育園年長児24名、2年生37 名、6年生25名について再テストを行った。その結果、 再テスト信頼性は .89であった。

研究 2

目 的

研究1で作成した自己統制尺度を用いて自己統制 の発達的変化を検討するとともに、尺度と他の自己 統制の測度との関連を吟味し、尺度の妥当性を検討 する。

方 法

被験者 研究1と同じ。

自己統制尺度 研究1と同じ。

その他の測度 自己統制尺度との関連を検討する ために、以下の測度を5、6年生に実施した。被験者 は実験者と1対1で向い合い、各課題を順に遂行し た。各課題は被験者ごとにランダムな順序に行った。 実験者はすべて同一人物であるが、被験者の自己統 制尺度の得点は知らされていない。

① DLST: Maccobyら(1965)のdraw a line slowly taskに基づいて作成したもので、自己の運動反応を抑制する力の指標と考えられる。被験者に約20cm離れた2つの点が印刷された紙を渡す。そして、鉛筆と定規を使ってできるだけゆっくり2点間に線を引くように教示する。実験者はストップウォッチで被験者が2点間に線を引いている時間を測定する。

② MFF : Matching Familiar Figures (MFF) は, 課題解決場面で自己の解決仮説の妥当性を考慮する 程度の個人差を測定するものである。自分が最初に 思いついた仮説を衝動的に行動として現すタイプと 自分の仮説を吟味熟考のうえ行動に移すタイプが存 在する。これらは認知的な衝動性-熟慮性(抑制性) の指標と考えられ、課題を超えた一般性と時間を超 えた相対的安定性があると言われている。熟慮的な 人は自己の反応の正しさを慎重に吟味するため,即 座に反応するのを抑制していると解釈でき、自己統 制力との一定の関連が予想される。本研究ではKagan らのMFFのうち、ドレス、家、電話、猫、船、ラン プの6種類を使用した。MFFはひとつの見本図版と 6つの選択図版からなる。選択図版のうち、ひとつ は見本図版と全く同じ物であるが、残りの5つは図 の一部が微妙に見本とは違っている。6つの選択図版 から見本と同じ物を選ぶのが被験者の課題である。 実験者は被験者が最初に図版を選択するまでの時間 (初発反応潜時) をストップウォッチで測定し, 正し い図版を選択するまでの誤反応数も記録する。6種類 の MFF の測定値の平均値を各被験者の値とした。 ③ PFスタディのGCR: Group Conformity Rating (GCR) とは PF スタディの12(成人用は14)の欲求 不満場面にあらかじめ定められている標準評点と被 験者の反応語の評点との一致度のことである。これ は欲求不満耐性の程度を示していると考えられる(岡 堂, 1970)。そこで, 各被験児にPFスタディを実施 し、GCRを算出した。評点は筆者とPFスタディに ついて学んだ大学生1名との合議により行った。

結果と考察

学年差及び性差 自己統制尺度の全体得点の平均 値及び標準偏差を学年別,男女別に示したのがTable 2である。7 (学生)×2 (性別)の分散分析を行った ところ,学年の主効果 (F(6,394)=2.90,P<.01) に有意差が認められた。Rvan法による下位検定を行 うと,保育園児と3年生(t=3.42,p<.05),1年生 と3年生(t=4.23, p<.05), 1年生と6年生(t=3.32, p<.05) の間に有意差が、1年生と4年生(t=3.27, p<.1), 1年生と5年生 (t=2.91, p<.1) の間に は傾向差認められた。概して、学年とともに自己統 制力が増す傾向がある。また、性別の主効果 (F(1,394) =11.84,p<.01) にも有意差が認められ、どの学年 においても女子の方が男子よりも自己統制力が高い ことが明らかになった。交互作用に有意差は見られ なかったが、自己統制力の変化には、男女間でやや 異なる傾向が認められる。 男子では、 学年とともに 比較的単調な増加を示しているのに対して、女子で はより複雑な変化が見られる。3年生の自己統制力が 最も高く、保育園児の値も1、2年生の値より高くなっ ている。

この結果は、自己統制力は女児の方が男児より有 意に高いとする Kendall ら (1979) や Humphrey (1982)、また自己統制は男女とも年齢とともに増大 し, すべての年齢で女児の方が男児より高いが, 男 児の方が安定した発達を示すとする柏木(1988)に 一致するものである。自己統制にこのような性差が 見られる原因は, 本研究だけでは明らかにならない が、親のしつけなどの社会化の要因が関与している 可能性は指摘できよう。日本では女性の性役割とし て「従順さ」を求める傾向がある (伊藤, 1978)。本 研究における女子の自己統制力の高さは、このよう な価値観を反映したしつけの結果と解釈できるかも しれない。また,一般に女子の女性役割選択が,男 子の男性役割選択よりも不安定であることが知られ ている。本研究において,女子の自己統制の発達過 程が不安定なのは、これに対応するものかもしれない。

さらに、各下位尺度毎に同様な分析を行った。個人的自己統制では、性別の主効果(F(1, 394) = 6.08、p<.05)に有意差が認められ、対人的自己統制では、学年の主効果(F(6, 394) = 7.50、p<.01)、性別

の主効果 (F (1, 394) = 19.36,p<.01) に有意差が認められた。

どちらの下位尺度においても女児の方が男児よりも自己統制力が高いことを示しており、全体得点の結果と同じ傾向が認められる。しかし、学年差は対人的自己統制においてのみ認められた。このことは、子どもの自己統制力のうち、5歳~11歳までの間に年齢とともに増大するのは対人的な場面で不適切な感情や行動を抑制するといった側面であり、課題の遂行をモニターし、達成の努力をするといった個人的側面には年齢差が見られないことを示すものである。

従って、自己統制には下位領域によって発達的なずれがあり、個人的側面は4歳ころまでにある程度発達して、その後はあまり大きな発達的変化はないのに対して、対人的側面はこれより発達が遅れるのかもしれない。

測度間の関係 DLSTの平均値は45.0秒である。学年別性別に平均値をもとめると、5年生男子が33.3秒、女子が49.8秒、6年生男子が56.6秒、女子が34.1秒である。対数変換した値について2(学年)×2(性別)の分散分析を行ったところ、交互作用に有意差(F(1,162)=8.08、p<.01)が認められた。そこで、男女別に学年差を下位検定すると、男子では5年生と6年生の間に有意な(t=2.47、p<.05)値の増大がみられるのに対して、女子では有意な(t=2.30、p<.05)値の減少が認められる。また学年別に性差を検討すると5年生では女子の値が有意に(t=2.53、p<.05)高く、6年生では逆に男子の値が有意に(t=2.35、t0<)高く、05)高くなっている。

以上より、DLSTを用いた運動の抑制には、一貫した学生差及び性差は認められなかった。すなわち、男子は5年生から6年生にかけて抑制的になるのに対して、女子は逆に衝動的になる傾向が認められた。また、男女差も、5年生では女子の方が抑制的であるのに対して、6年生では男子の方が抑制的であった。これらは、類似の課題を用いて年少児(3:4~

Table 2 自己統制尺度の平均値及び標準偏差

	保育園児	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	全体
男	25.57(7.79)	26.93(12.33)	30.03(8.52)	33.38(10.62)	30.48(12.09)	31.61(11.46)	32.00(10.27)	30.50(10.97)
女	34.21 (9.54)	28.21(12.29)	31.39(8.64)	41.16(5.29)	39.61(11.46)	34.61(13.31)	36.54(11.81)	35.17(11.91)
全体	28.91(9.56)	27.51(12.21)	30.72(8.54)	37.12(9.03)	34.73(12.59)	33.33(12.56)	33.95(11.13)	32.74(11.65)

4:6)と年長児($5:4\sim5:11$)を比較したところ,年長児の方が抑制的でどちらの年齢群でも女子の方が抑制的であるとする柏木(1988)とは異なる結果である。また,Tonerら(1977)も $3\sim5$ 歳児を対象に調べたところ年長児の方が年少児よりも有意に抑制的だとしている。この違いが被験者の年齢の違いによるものか,それ以外の要因によるものかは本研究からは明らかにならない。広い年齢範囲にわたる組織的な研究が必要である。

DLSTと自己統制尺度の全体得点に有意な正の相関 (r=.15, p<.05) がみられ、個人的自己統制得点と の間にも有意な正の相関 (r=.16, p<.05) が認められた。従って、運動抑制力が高いほど自己統制力も高く、特に個人的場面における自己統制力と関連があることが明らかになった。

MFFの誤反応数の平均値は0.46である。学年別性別に平均値を求めると、5年生男子が0.61,女子が0.41,6年生男子が0.43,女子が0.44である。学年間を比較すると、男子は減少傾向にあるが、女子にはほとんど変化がみられない。これらの値について2(学年)×2(性別)の分散分析を行ったところ、有意差は見られなかった。

MFF の潜時の平均値は19.21秒である。学年別性別に平均値を求めると、5年生男子が17.19秒、女子が20.84秒、6年生男子が19.35秒、女子が18.85秒である。学年間を比較すると、男子は潜時がやや増大する傾向に、女子は逆にやや減少する傾向にある。しかし、対数変換した値について2(学年)×2(性別)の分散分析を行ったところ、有意差は認められなかった。

MFFの誤反応数と自己統制尺度の全体得点(r=-.15, p<.05) 及び個人的自己統制得点(r=-.19, p<.01) との間に有意な負の相関が認められた。一方、MFF 潜時と本尺度の各得点との間に相関はみられなかった。Tonerら(1977)は、平均年齢4歳3カ月の被験児について、MFFの潜時及び誤反応数と複数の自己統制の測度との関係を検討している。その結果、MFFの潜時よりもMFFの誤反応数と各測度との間により多くの相関が認められ、自己統制行動の予測にはMFFの誤反応数の方が有効だとしている。本研究の結果もこれに一致するものである。

自己統制尺度とMFFの誤反応数との間に有意な負の相関が認められたことから、認知的な抑制性が高

いほど自己統制力も高いものと考えられる。特に, 個人的な場面における自己統制力との関係が深いも のと考えられる。

DLST 及び MFF と自己統制尺度の対人的自己統制得点の間には、有意な相関は認められなかった。これは DLST、MFF がどちらも被験者が 1 人で遂行する「個人的」課題であり、「対人的」状況における自己統制を反映したものでないことが原因かもしれない。

DLSTとMFFの関係を検討すると、DLSTとMFFの潜時に正の (r = .31, p < .01)、DLSTとMFFの 誤反応数に負の (r = -.14, p < .05) 有意な相関が認められた。どちらも運動反応の抑制性が高いほど認知的な抑制性も高いことを示している。

PFスタディのGCRと本尺度の各得点に有意な相関は認められなかった。

以上のように、DLST 及び MFF と本尺度の間に 有意な相関が存在することは、本尺度の一定の妥当 性を示すものと考えられる。

研究 3

目 的

研究1で作成した自己統制尺度と誘惑への抵抗課題を利用して幼児の自己統制を測定し、これに母子関係が及ぼす影響を検討する。また、子どもの知能とこれらとの関係も検討する。

方 法

被験者 被験者は東京近郊の幼稚園の年長児とその母親19組である。園児の平均年齢は5才9カ月である。

自己統制の測定 以下の測度で自己統制の測定を 行った。

- ① 自己統制尺度:研究1で作成されたものを使用する。評定は各母親に依頼した。
- ②誘惑への抵抗課題(RTT):実験助手は子どもを個室に案内し、机の前にすわらせる。個室の一方の壁にはワンウェイミラー、天井にはビデオカメラとマイクが設置されており、隣接する観察室より個室の内部が観察、記録できるようになっている。個室の机の上には、誘惑物としてサッカーゲーム、野球ゲームが置かれている。実験助手は忘れ物を別室に取りに行くから、暫く1人で待っているようにと子どもに伝え退室する。その際、机の上のおもちゃに

触れること、椅子から立って歩き回ることを禁じる。 実験者は実験助手が退室した後の子どもの行動を観察室より10分間観察するとともに、ビデオに記録する。このビデオから、実験助手が退室してから子どもが初めて逸脱行動をするまでの潜時と逸脱行動をしていた時間の総計が実験後に測定された。なお、ビデオの分析は筆者と助手1名との合議により行われた。

母子関係の測定 以下の測度によって母子関係の 測定を行った。

① 行動観察:実験助手は母子ともに個室に案内し、 部屋の中央にある机の前にすわらせる。この部屋も RTTの場合と同様に、ワンウェイミラー、ビデオカ メラ,マイクによって隣接する観察室より内部が観 察可能である。部屋の四方の壁には棚があり、棚に は自動車,怪獣,人形,ぬいぐるみ,ゲーム類,野 球道具などのおもちゃが多数置かれている。また, 机の上にはジグソーパズルが置かれている。実験助 手は少々待ち時間があるため、パズルをしながら待っ ているようにと母子に告げ退室する。実験助手退室 後の母子の行動は、ビデオカメラによって10分間観 察、記録する。このビデオによって、行動観察の測 度として次の時間が測定された。 a) 母親だけが課 題を遂行していた時間の総計, b)子どもだけが課 題を遂行していた時間の総計, c)母子ともに課題 を遂行していた時間の総計, d)棚のおもちゃで遊 ぶなど、母子ともに課題遂行に関係のない行動をし
 ていた時間の総計, e) 母親が課題に関する言及を した時間の総計, f)棚のおもちゃについてなど, 母親が課題遂行に関係のない言及をした時間の総計, g) 母親の子どもへの総言及時間の7種類である。 ビデオの分析は筆者と助手1名との合議によって行 われた。

② 育児態度の測定: 母親の育児態度を測定するために、Symonds (1939), 品川・品川 (1958), 品川・品川・森上 (1968) を参考にして、8つの育児態度を測定する尺度を作成した。8つとは、a)子どもに対して無視、無関心を示す「消極的拒否型」、b)子

どもに体罰,虐待を示す「積極的拒否型」, c)子どもに常に厳格に接し、絶えず監督している「厳格型」, d)親の要求や野心を強要する「期待型」, e)子どもの世話をやきすぎる「干渉型」, f)過剰な不安をもって子どもに接する「不安型」, g)子どもと心理的肉体的に強く結び付いて離れられず、ねこかわいがりする「溺愛型」, h)子どもの要求は何でも受け入れてあまやかす「盲従型」である。

各下位尺度はそれぞれ5つの質問項目から成り¹⁾, 母親が3段階で評定する。

知能の測定 田中ビネー式知能検査を被験者の園 児全員に筆者が実施した。

結果と考察

自己統制尺度とRTTの関係 自己統制尺度の全体 得点の平均値は38.15, 個人的自己統制得点の平均値 は21.30, 対人的自己統制得点の平均値は17.05である。

自己統制尺度の全体得点とRTTの潜時との間に有意な正の相関(r=.41, p<.05)が認められた。下位尺度ごとに検討すると,個人的自己統制得点とRTTの潜時との間に有意な正の相関(r=.51, p<.05)がみられた。従って,本尺度による自己統制力が高いほど,また,個人的場面における自己統制力が高いほど誘惑に抵抗する能力も高いものと考えられる。

自己統制と母子関係 知能を一定にした時の自己 統制尺度と母子行動観察との偏相関をもとめると, 自己統制尺度の全体得点と「母子ともに課題遂行に 関係のない行動をしていた時間」に有意傾向の負の 相関 (r=-.37, p=.06) が認められた。

下位尺度ごとに検討すると,個人的自己統制では「母子ともに課題遂行に関係のない行動をしていた時間」(r=-.34, p=.08),「母親が課題遂行に関係のない言及をした時間」(r=-.36, p=.07) との間に有意傾向の負の相関が見られた。対人的自己統制では,全体得点と同じく「母子ともに課題遂行に関係のない行動をしていた時間」との間に有意傾向の負の相関(r=-.32, p=.09) が見られた。

行動観察では、母子は実験者から「パズルをしな がら待っているように」と教示され、課題の遂行が

注 1) 各下位尺度の5項目は、「田研式 親子関係診断テスト」の質問項目から下位尺度毎の内的整合性を考慮しながら選択したものである。本尺度の消極的拒否型尺度の5項目は田研式親子関係診断テストの1-3, 4, 5, 6, 10, 同様に積極的拒否型尺度項目は2-1, 3, 7, 8, 10, 厳格型尺度項目は3-2, 4, 6, 8, 9, 期待型尺度項目は4-1, 3, 4, 5, 6, 干渉型尺度項目は5-3, 4, 5, 8, 10, 不安型尺度項目は6-1, 3, 4, 7, 10, 溺愛型尺度項目は7-1, 2, 4, 6, 10, 盲従型尺度項目は8-1, 4, 6, 7, 10である。各下位尺度のα係数を検討すると、6尺度は.70~.83と一応満足できるものであったが、積極的拒否型尺度、溺愛型尺度は.65であった。この2尺度に関して、項目数を増やし信頼性を高めることも検討されたが、母親に評定を依頼する際に項目数が多いのは不都合なため、このまま使用することとした。

求められる。従って、パズルの遂行は一定の強制力をともなった実験場面の「社会的ルール」と母子に認知されているものと考えられる。一方、ここで使用されたパズルは、5歳児にはかなり難しく興味の持てるものではなかった。これに対して、棚のおもちゃは子どもにとって極めて魅力的な物である。子どもはパズルをしなければならないことは理解していても、パズルはやめて好きなおもちゃで遊びたいと強く望んでいたと推測される。

上記の結果は、このような葛藤的な状況で母親が子どもの課題遂行からの逸脱、すなわち社会的ルールからの逸脱を容認し追従する傾向が大きいほど、子どもの日常の自己統制力が劣ることを示していると考えられる。また、母親が課題と無関係な言及をするほど、つまり母親が率先して社会的ルールを逸脱する傾向が大きいほど、子どもの日常の個人的場面での自己統制力が劣ることが明らかになった。このことは、母親の行動や言動が子どもの自己統制の低さを直接強化しているだけでなく、モデルともなっている可能性を示唆するものである。

次に、自己統制尺度と育児態度の関係を調べるために、子どもの知能を一定としたときの自己統制尺度と育児態度との偏相関をもとめた。その結果、自己統制尺度の全体得点と育児態度の厳格型得点(r=-.64, p<.01)、盲従型得点(r=-.60, p<.01)、消極的拒否型得点(r=-.57, p<.01)の間に有意な負の相関が認められた。

さらに、下位尺度ごとに検討すると、個人的自己統制では全体得点と同様の相関が見られるが(消極的拒否型得点:r=-.39, p<.05, 積極的拒否型得点:r=-.49, p<.05, 厳格型得点:r=-.58, p<.01, 盲従型得点:r=-.49, p<.05), 対人的自己統制では同様な相関(消極的拒否型得点:r=-.43, p<.05, 積極的拒否型得点:r=-.55, p<.01, 厳格型得点:r=-.55, p<.01, 商化型得点:r=-.55, p<.01, 下述型得点:r=-.55, p<.05), 干涉型得点(r=-.40, p<.05), 不安型得点(r=-.42, p<.05) とも有意な負の相関が見られた。

以上より、母親が厳格型、盲従型、拒否型といった育児態度をとる傾向が強いほど、言い換えると、命令や禁止によって絶えず子どもを監視したり、要求は何でも受け入れ、子どもの言いなりになったり、愛情の欠如、援助の拒否などの態度をとったりする

傾向が強いほど、子どもの自己統制力は劣る傾向が あることが明らかになった。

また、対人的自己統制に関しては異なる傾向がみられ、母親が期待型、干渉型、不安型といった育児態度をとる傾向が強いほど、子どもの対人的自己統制力は劣る傾向が認められた。

期待型のような支配的態度や干渉型、不安型といった過保護な育児態度の親に育てられた子どもは、同年齢の子どもとの接触が妨げられて社会的成熟が遅れることが指摘されている。従って、上記の育児態度と対人的場面で不適切な感情や行動を抑制するといった対人的自己統制との関連には、母親の直接的な影響ばかりではなく、同年齢集団との関わりの欠如が介在している可能性が考えられる。

なお、RTTの潜時及び総逸脱時間と母子関係の各変数との間に有意な相関はみられなかった。

母子行動観察と育児態度の関係 母子行動観察と 育児態度との関係を調べるために知能を一定にした 偏相関をもとめると、「子どもだけが課題を遂行していた時間」と期待型得点 (r=-.43, p<.05) 及び不安型得点に負の (r=-.48, p<.05),「母子ともに課題を遂行していた時間」と不安型得点に正の (r=.41, p<.05) 有意な相関が認められた。

品川ら(1958)によると、期待型とは子どもの能力や適性を無視して、もっぱら親の要求する方向や水準へ従わせようとする態度である。また、不安型とは子どもの日常生活、学業などに、ほとんど無意味と思われる程の心配や不安を抱き、過剰な保護を与える態度である。どちらも、子どもの自主性、自発性を軽視し、過度の指示や援助を与えるタイプである。このような育児態度を母親が多くとるほど、本研究のような課題場面においても子どもは依頼心が強く、自ら進んで問題解決をすることが少ないことが明らかになった。特に、不安型の母親は課題の遂行を子どもに任せておけず、実際に手を出してしまう頻度が高いものと考えられる。

各変数と知能との関係 被験者の平均知能指数は 127であった。自己統制尺度,RTTと知能との関係 を検討したところ,これらの間に有意な相関は見られなかった。従って,本尺度で測定される自己統制 やRTTで測定される誘惑への抵抗力は,知能検査で 測定される知的能力とは異なる能力であることが示唆される。この結果は,Kendallら(1979)を支持

するものである。

母子行動観察と知能の関係を調べると、知能と「母子ともに課題を遂行していた時間」(r=.66, p<.01),「母親が課題に関する言及をした時間」(r=.77, p<.01),「母親の子どもへの総言及時間」(r=.58, p<.01)の間に有意な正の相関が認められた。また、「母子ともに課題遂行に関係のない行動をしていた時間」(r=-.44, p<.05),「母親が課題遂行に関係のない言及をした時間」(r=-.41, p<.05))との間には有意な負の相関が認められた。従って、母親と子どもが共同して課題解決をし、課題の遂行にあたって母親が課題解決の助けとなるような話かけをすることが多いほど子どもの知能は高い傾向がある。一方、母親も子どもも課題と関係のない行為をしたり、母親が課題の遂行と関連のない会話をするなど課題志向性が低いほど、子どもの知能は低い傾向が認められた。

育児態度と知能の関係を調べると、消極的拒否型得点 (r=-.44 p<.05) との間に有意な負の相関が認められた。すなわち、母親が子どもに対して放任、無関心、無視といった態度をとる傾向が強いほど、子どもの知能は低い傾向があるものと考えられる。

全体的考察

本研究では, まず幼児, 児童を対象に自己統制尺 度を作成し、その信頼性と妥当性の検討が行われた。 その結果, 信頼性, 妥当性ともにほぼ満足な値が得 られた。次に、自己統制力の発達的変化と性差が検 討され、自己統制力は男子は学年とともに比較的単 調な増加を示すのに対して, 女子はより複雑な変化 を示すことが示唆された。また、どの学年において も女子の方が男子よりも自己統制力が高い傾向が認 められた。次に、自己統制と母子関係の関連が検討 され、母親の社会的ルールからの逸脱傾向と子ども の自己統制力の低さとの間に一定の関連が認められ た。また、母親が厳格型、盲従型、拒否型といった 育児態度をとる傾向が強いほど子どもの自己統制力 は劣ることが示唆された。さらに, 知能と自己統制 力の関係を検討したところ,両者に有意な関係は認 められなかった。

本研究では、自己統制尺度によって測定される総体的な自己統制力と母子関係との関連を検討してきた。しかし、今後研究を発展させ、さらに分析的な検討を進めていくためには、まず自己統制の構造を

明らかにする必要がある。この点に示唆を与えるのがBandura (1986)のモデルである。Bandura は自己統制過程のモデルとして、自己観察過程、判断過程、自己反応という3つの過程からなる下位過程を提唱している。自己観察過程では、自己統制すべき自分の行動のある側面に選択的な注意が向けられる。判断過程では自己観察過程で明らかになった自己の遂行水準と、その行動の社会的基準や個人的基準との比較判断により、遂行結果の自己評価が行われる。この判断結果に基づいて自己反応過程では自己評価反応や自己報酬が生起する。高い自己統制力を持つためには、これら3つの下位過程がどれも適切に機能している必要があるものと考えられる。

ところで, Kopp (1982) は親子間の相互的なコミュ ニケーションから自己統制における自己観察(自己 モニタリング)が発達することを指摘しており、母 子関係は自己統制の各下位過程の発達に影響し、子 どもの自己統制力を規定している可能性がある。こ のように仮定すると、本研究の自己統制と育児態度 の関係は下位過程との関連から解釈することも可能 である。親が子どもを絶えず監視しているような厳 格型の育児態度のもとでは, 子どもが自律的に自分 の行動に注意を向け反省するような態度, すなわち 自己観察過程や判断過程がうまく育たない可能性が ある。また、子どもの要求は何でも無条件で受け入 れるような盲従型の育児態度のもとでは、判断過程 における適切な社会的基準が形成されないであろう。 さらに,期待型の親は,子どもの能力や適性を無視 して自分の要求や野心を強要するため、子どもは判 断過程における評価基準を常に親に求め, 適切な自 己評価基準を形成できないものと考えられる。こう したことが自己統制力が劣る原因だと解釈すること も十分可能であろう。

このように考えると、ひとつの育児態度がある下位過程にには影響するが、他の下位過程には影響しないという具合に、下位過程によって異なる働きをする可能性も指摘できる。つまり、自己統制と母子関係の関連の分析にあたっては自己統制のどの下位過程に母子関係のどのような側面がかかわり、その結果どのような発達が見られるのかという視点が重要であろう。こうした視点は、子どもの自己統制と母子関係の関連を詳細に検討するうえで有効なものと考えられる。しかし、このような視点からの実証

的研究はほとんど存在しない。わずかにメタ認知研究に関連する研究が存在する程度である。丸野 (1989) はメタ認知の起源が母子相互交渉などの社会的相互交渉過程にあるとして、母子相互交渉と問題解決過程の関連を4~5歳児で調べている。その結果、子ども自身が活動主体であると考える母親が間接的な介入方略を用いて、子どもが「迷い」「ためらい」「立ち止まり」現象を多く示すと、その子どもは独自の解決場面で適切な自己発問や自己修正を試み、結果的に自己観察(自己モニター)技法を身につけ高得点を得るとしている。

上記のような視点からの研究を発展させるためには、まず、各下位過程を独立に測定する方法を開発し、これと母子関係との関連を検討する必要がある。 今後の課題である。

謝辞

本論文の作成に当たり、御指導頂きました前立教大学教 授中島力先生に深く感謝いたします。

文 献

- Arend, R., Gove, F.L., & Sroufe, L.A. Continuity
 of individual adaptation from infancy to
 kindergarten: A predictive study of egoresiliency and curiosity in preschoolers. *Child Development*, 1979, 50, 950-959.
- 2) 東洋・柏木恵子・R.D.ヘス 母親の態度・行動と子 どもの知的発達 東京大学出版会 1981.
- Bandura, A Social foundation of thought & action. Prentice-Hall, 1986.
- Grusec, J. E., Kuczynski, L., Rushton, J. P., & Simutis, Z. Learning resistance to temptation through observation. *Developmental Psychology*, 1979, 15, 233-240.
- Humphrey, L. L. Children's and teacher's perspectives on children's self-control: The development of two rating scales. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 1982, 50, 624 -633.
- 6) 伊藤裕子 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究 1978, 26, 1-10.
- 7) 柏木恵子 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会 1988.
- 8) Kendall, P. C., & Wilcox, L. E. Self-control in children: The development of a rating scale.

- Journal of Consulting and Clinical Psychology, 1979, 47, 1020–1030.
- 9) Kopp, C. B. Antecedents of self-regulation: A developmental perspective. *Developmental Psychology*, 1982, 18, 199-214.
- 10) Maccoby, E. E., Dowley, E. M., Hagen, J. W., & Degerman, R. Activity level and intellectual functioning in normal preschool children. *Child Development*, 1965, 36, 761-770.
- 11) 丸野俊一 メタ認知研究の展望 九州大学教育学部 紀要(教育心理学部門) 1989, **34**, 1-25.
- 12) Mischel, W. Processes in delay of gratification. In Berkowitz, L. (Ed.) Advances in experimental social psychology. (Vol. 7) Academic Press, 1974.
- 13) Mischel, W., Shoda, Y., & Rodriguez, M. Delay of gratification in children. Science, 1989, 244, 933-938.
- 14) 西野泰広 幼児の自己制御機能と保母のかかわり 発達の心理学と医学 1990a, 1, 235-247.
- 15) 西野泰広 母子関係と自己制御行動の発達 発達の 心理学と医学 1990b 1, 333-344.
- 16) 岡堂哲雄 欲求不満耐性の診断 児童心理 1970, 24, 125-130.
- 17) Sawin, D. B., & Parke, R. D. Development of self -verbalized control of resistance to deviation. *Developmental Psychology*, 1979, **15**, 120-127.
- 18) 品川不二郎・品川孝子 田研式親子関係診断テスト の手引 日本文化科学社 1958.
- 19) 品川不二郎・品川孝子・森上史郎 田研・両親態度 診断検査 明治図書 1968.
- 20) Strommen, E. A. Verval self-regulation in a children's game: Impulsive errors on "Simon says." *Child Development*, 1973, 44, 849-853.
- 21) Symonds, P. M. The psychology of parent-child relationships. New York: Appleton-Century, 1939.
- 22) 田島信元・柏木恵子・氏家達夫 幼児の自己制御機能の発達:絵画自己制御能力テストにおける4-6歳の縦断的変化について 発達研究 1988, 4, 45-63.
- 23) Toner, I.J., Holstein, R.B., & Hetherington, E.M. Reflection-impulsivity and self-control in preschool children. *Child Development*, 1977, 48, 239-245.
- 24) 氏家達夫・柏木恵子・田島元信 幼児の自己制御機 能測定の試み(2)発達研究 1990, 6, 87-99.
- 25) 氏家達夫・田島信元 幼児の自己統制機能測定の試み 発達研究 1987, 3, 105-114.